

VELUX®

古民家再生と光



暮らしにあふれる光と風。

いかしの舎・中庭からの外観
明治から大正にかけてつくられた旧
家を町のコミュニティー施設に再生。
右の茶室は八窓庵の写し。

古民家再生

周辺に豊富に存在する古民家を
どう残すかより、どう住み続けていくか。
そこで6人が集まった。

岡山県に、古民家の再生に取り組む6人の建築家グループがある。
古民家再生工房。1988年に結成されて以来、現在に至るまで
共同作品「いかしの舎」をはじめ、個別に数々の再生を手がけてきた。

古民家という「懐かしい」「残していかなければ」という固定観念が
とかく先行する世の中であって、現代の暮らしに沿う機能性はもちろん、
実験的な試みを臆することなく盛り込んだ彼らの作品は、
むしろスーパーモダン、アバンギャルドとさえ言える。
単なる復元・保存ではない、ひとつの建築手法としての確立をめざす、
彼らの再生のポキャブラリー。それらは住宅のまったく新しい可能性と、
後に続く若手建築家への有益なヒントに満ちていた。

工房



大角 雄三
(おおすみ・ゆうぞう)
1949年岡山県津山市生まれ
倉敷建築工房大角雄三設計室主宰



神家 昭雄
(かみや・あきお)
1953年岡山県岡山市生まれ
神家昭雄建築研究室主宰



佐藤 隆
(さとう・たかし)
1945年岡山県早島町生まれ
佐藤隆建築研究所主宰



榎村 徹
(ならむら・とおる)
1947年岡山県倉敷市生まれ
倉敷建築工房榎村徹設計室主宰



萩原 嘉郎
(はぎわら・よしろう)
1947年岡山県倉敷市生まれ
萩原嘉郎建築事務所主宰



矢吹 昭良
(やぶき・あきよし)
1939年岡山県早島町生まれ
矢吹昭良建築設計事務所主宰

【表紙写真】大多羅の家：土間を改造した居間食堂。トップライトの光がこの家の歴史を感じさせる黒い梁を照らし構造を浮かび上がらせる。

日常の風景のなかに民家があった



古民家再生工房のメンバーは、普段は個人の設計事務所などで別々に活動しているが、月に一度のペースで定例会を開き、6人が集まって情報交換や建築論を戦わせる場としている。「地方だとどうしても刺激が少なくなる」というのがその理由だ。今回はその定例会を借りて、工房のこれまでの軌跡を振り返り、現在の個々の到達点を語ってもらった座談会とした。場所は榎村氏の設計事務所、通称「創想舎」の1階サロン。ここもまた、江戸時代の藍染めの納屋を再生した建物である。古民家再生工房のデザインの特色のひとつである「色気」を象徴したような空間の中で、まずは工房の創始者の一人である矢吹氏が口火を切った。

発足当時、古民家再生は建築家にとって創造的な仕事ではないと思われていた。何でそんな古くさいことをやるのかと。

…なぜ「古民家」の再生を？

矢吹：これから住宅を手がけていくなかで、日本の風土や景観の問題を考えれば、民家が一番なじむだろうと。周りにたくさんありましたしね。

榎村：古民家というのはだいたい戦前くらいまでに建てられたものを指すのですが、倉敷は震災に遭っていないから、古い民家が今もたくさん残っている。しかも財力のある商家が、京都や大阪から職人を呼んで競い合っ建てたような、レベルの高いものが多いんです。私は倉敷で生まれて、子供の頃からそういう民家を普通に見てきた。だから、美観地区にある特別な文化財という意識はない。ちょっと外に出れば、石を投げたら当たるくらい民家がいっぱいある中で、それを「どう残す」というより「どう住み続けていくか」、その方法を考えたということですね。東京の人なんかと話していると思うのは、民家を非日常で考えているということなんです。我々は日常で考えている。そのズレがあるから、話もどうしてもズレてきちゃう。

佐藤：私も古い民家で生まれ育って、今も民家に暮らしている。民家は体の一部のようなものなんです。

榎村：だから特別、何かの衝撃を受けて民家を選んだわけじゃない。建築をやっていて、たまたま身の周りに民家という素材が豊富にあった。そこに我々の手法をもってすれば、江戸村のような特殊な状況ではない、もっと活きたものが創り上げていけるんじゃないかと。

神家：でも、発足当時は逆風でしたよね(笑)。「若い建築家が、何でそんな古くさいことを」という批判が多かった。古民家再生は、建築家としては非常にネガティブな、創造的ではない仕事だと思われていたんですね。

「壊したくない」という住み手の思いにごまかしや小手先の改造ではなく、根本的な再生という手法で応えたかった。

…古民家再生工房発足の経緯は。

矢吹：もともと、古民家再生工房の前身ともいえる、「文化としての建築を考える建築家の会」というグループを私と榎村君たちで作っていたんです。当時はまだ、テーマとして民家があったわけではなく、メンバーそれぞれが、地域で存在感ある住宅を考えようということで活動していました。建築について意見を交わしたり、実作を見て議論したり、写真展を開いたり。

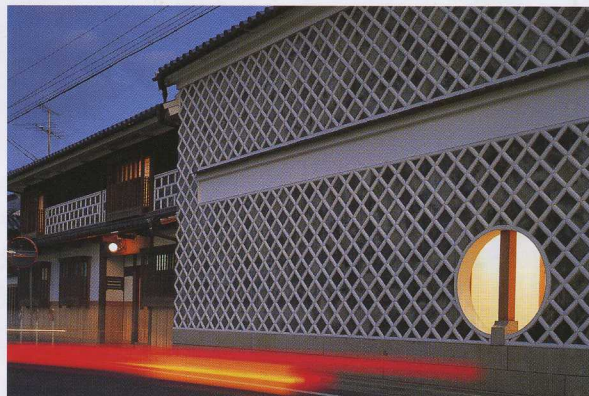
萩原：私が大阪から岡山に帰ってきた時に、ちょうどそのグループができていたんです。で、子どもの頃は野暮ったいと思わなかった民家にあらためて触れてみると、建築家としてはやはり見るべきものがあると。民家のもつコスモロジーとかね。じゃあ、一緒にやろうということになって。

榎村：「古民家再生工房」になった直接のきっかけは、1986年に、国際居住年記念のテレビ番組「甦る民家」で、私と矢吹さんが手がけた2軒の再生です。テレビで「古い民家を提供してください」という募集をかけたら、1週間で40〜50軒もの申し出があったんですよ。

そこで私と矢吹さんが1軒ずつ見て回ると、どれも立派な家だし、オーナーはみんな「本当は壊したくないんだけど」と言っている。

矢吹：それまでは「古い民家を直したい」というと、工務店や大工が「そんなバカなことをしたら2倍も3倍もカネがかかる、檜普請の新築が建つよ」と言っていたんですよ。「どうしてもやってくれ」と言えば、プリント合板をベタベタ貼ってごまかすようなことしかやらない。我々が今やっているような、根本的な再生を行うということは、まったく考えになかったんですね。

榎村：そんな状況の中では、我々が一般のニーズに応える窓口としてもっとアピールしていかなければと。そこで「甦る民家」のあと、考えを同じくする6人が集まって、'88年に「古民家再生工房」がスタートしたんです。



いかしの舎・街道に面する長屋門・蔵。
蔵は展示室・喫茶コーナーに改造。新たに開けた丸窓からは展示室が見える。

再生は建築のひとつの手法だ

我々はデザイン志向がかなり強い。
古民家再生を建築の一手法として捉え、
建築としての質を追求している。

萩原：我々は正義の味方でもなんでもない、ただ面白がってやっているというのが強いんですよ。

神家：自然素材を使って、すべて手作りでやっていますからね。いまはそれが価値があるように言われるけど、本当は昔からそういうやり方です。戦後の近代化の中で工業製品がどんどん出てきて、作り方が違う方向に行っちゃったけど、民家というのは元々がそういうものなんで、特別に自然素材を使おうとか環境を考えて、なんて意識はあまりないんです。

植村：そういう意識はないんだけど、我々はデザイン志向がかなり強く、「再生」を建築の設計上のひとつの手法として確立させたいという思いは強い。

神家：植村さん、いつも言っていますよね。「結果として保存に繋がれば一番いい」って。

植村：そう。こちらが「あなたの家は古いからいいですよ、残さないよ」と言うのは大きなお世話だと思う。我々の仕事を見た人が、自分の古い民家もこんなふうにして住みたいと思えば、結果として残っていくんじゃないでしょうか。

萩原：テキストとしての価値があろうとなかろうとね。そこに暮らす人が民家を壊すのが惜しいと思ったら、その欲求に応えるのが建築家の役割だと思います。さっき創造的な仕事ではないって話が出ましたが、オリジナリティに対する考え方だと思うんですよ。西洋的にはオリジナリティって、個人の所有物で

サロン・ド・ヴァンホー
江戸期の武家庄屋の母屋をギャラリーに再生。広い土間の上に広がる、間に包まれた空間にトップライトからの光が、迫力ある構造を浮かびあがらせる。

**保存や修復が目的じゃない。
ましてや正義の味方でも何でもない。
ただ面白がってやっている、それが一番。**

…最近では古民家再生がブームのようになっていますが？

植村：実は、そこが我々の大きなジレンマ、フラストレーションになっています。非常に誤解をされやすいんですが、我々は保存や修復を目的にスタートしたわけではないし、木の温もりがどうかというサイ意識もまったくない。それに、いま世間で騒がれていること、たとえばリサイクルもサステナブルもシックハウスもエコロジーも、おそらく我々がやっていることは全部当てはまると思うんです。でも、そんな意識は全然ない(笑)。

Point

いかしの舎・母屋
もとは和室や台所があった場所を床や壁を取り払ってつくった吹抜けのある土間ホール。





地方でやっているとどうしても刺激が少ないですから、そういう悪口の言い合いが必要になる(笑)。

矢吹：東京の方なんか取材に来て言われるのは、いろんな建築家がいるけれども、こんなに早くレベルが上がっていった人たちは珍しいと。それはやはり、机上の空論じゃなくて、それぞれの実作をもとに6人が集まって好きなことを言い合う、その繰り返しの結果だと思えます。

梶村：我々はずっと、ベースになるノウハウはどんどん公開して、共有していこうという考え方でやってきた。個性はあとから自然に出てくるんだから、そこでノウハウを出し惜しんでも仕方ない。

神家：たとえば、誰かが弁柄漆喰を塗った

あって他人とは共有できないという考え方なんですけど、我々の中ではそんなことはない、と。たとえば日本の「うしし」とか「本歌取り」のように、先達のものに対して自分の解釈を加えて、より新鮮ないものをつくろうというような、日本独特の考え方がある。古民家再生はそういうこととつながっていて、古いものの中に新しい意味での創造性を加えるんだ、という気持ち強い。

梶村：それが最近の古民家再生ブームとかで、一般の雑誌のなかでも、田舎の囲炉裏に串刺して食ってる人間と一緒に出てしまう。再生と民芸がごちゃ混ぜなんです。そういう意味で非常にストレスを感じることはある。それが分かってもらえるまでつくり続けるしかないか、という気持ちもありますね。

**個性は後から自然に出てくるもの。
基になるノウハウを公開・共有しながら
議論を重ねることでレベルが上がった。**

…6人で活動することの意義については？

矢吹：これもよく誤解されるんですが、我々はいつも6人で活動しているわけではないんですよ。6人一緒に手がけたのは、「いかしの舎」だけ。

神家：一人ひとりが自分の建築事務所を構えていますから、普段は別々に活動しています。再生だけじゃなくて新築もやっていますね。それで月に1度は定例会を開いて、情報交換したり、建築論を戦わせたり。

梶村：メンバーの誰かが何か建てた時も、皆でワーッと見に行っって好きなことを言います。かなりキツイこともね。

のを見ると、その調合比が何対何ということまでわかるわけです。それが良かったら真似をするんだけど、それ以上のいいものにしないとボロカスに言われる(笑)。じゃあ1割ほど比率を変えてみたらどうなるかとか、そんなことを一生懸命やってきたから、ノウハウの積み重ねもできたし、レベルが上がるのも早かったでしょう。

萩原：僕は学生の時に先生から「つまらんオリジナルより、すばらしいコピーのほうがいい」という話を聞いてすごくショックを受けたんですよ。それからいろいろ考えていると、日本の職人の技術とかが高いのは、やっぱり「わしが、わしが」じゃなしに、同じ土壌のなかで淘汰されつつ、いいものが継承されていくシステムができていたんじゃないかと。そういう意味でも、作品を公表して批判しあったり、いいものを共有したり、つまり一度使ったものは誰が使ってもいいと、自分だけの専売特許ではないんだという考え方が6人のなかにあるんですよ。



▲長時間にわたって活発な建築談義が続いた。左から神家氏、梶村氏、佐藤氏、萩原氏、矢吹氏、大角氏。

◀西阿知の家
母屋と蔵をつなぐ土間と玄関ホール。繋ぎ部分は吹抜とし、屋根は全面にガラスをはめ、下の土間まで光を入れる。



加須山の納屋
再生では既存の耐力壁の量を減らすことなく開口部を設けられる天窓による採光が有効。新設の間仕切壁は梁間方向の耐力壁としても働く。

